

幼児の傷害事故に関する調査研究 -発生頻度を中心として- (分担研究：小児の事故とその予防に関する研究)

小林 至泰、秋山 斉

要約：神奈川県の中央地区に位置するA市およびE市の保育所・幼稚園に在籍する1歳から5歳までの幼児の母親（保護者）を対象に、幼児の傷害事故に関するアンケート調査を実施した。2006名（回収率80.2%）を回収し、このうち有効回答者1971名について分析した。過去1年間について「けが（傷害）」をした児は、男児48.7%、女児32.5%で、そのなかで受診した児は、男児女児ともに50%を超えていた。また、過去1年間の受傷発生頻度は、5回位は3歳～5歳児に多く、20回以上は1歳～2歳の年少児に多く認められた。受傷部位としては、年少児に頭部・顔面が多く、年長児には下肢が多かった。高い割合で認められたけがの種類は、全年齢通じて擦傷か打撲が占めていて、けがの主なる原因としては同じく全年齢を通じて転倒が最も多かった。調査期間中（1週間）になんらかのけがをした曜日別発生頻度では、日曜日が最も多く、以下土曜日、月曜日の順であった。

見出し語：幼児のけが（傷害）、発生頻度、受診状況、受傷部位、けがの種類と原因、

はじめに

我が国においては、人口動態統計による死亡統計を除くと、小児の事故の実態に関する統計資料は極めて少ない。とくに死亡に至らない傷害事故に関する実態把握については、必ずしも十分とはいえず、この領域での基礎資料の収集は急務といえる。そこで、幼児の不慮の事故のなかで今回は、けが（傷害）に注目して、その発生頻度を中

心に調査し、検討を加えたので報告する。

対象

神奈川県の中央地区に位置するA市（人口約21万）およびE市（人口約12万）の保育所・幼稚園に在籍する1歳から5歳までの幼児の母親（保護者）2500名を対象に実施した。

方法

幼児の過去1年間にしたけが（傷害）事故を中心に

母親（保護者）に無記名のアンケート調査を実施した。調査内容としては、過去1年間にしたけがについて、けがの有無、発生頻度、受診状況、けがの発生場所、受傷の部位、けがの種類、けがの原因等を集計した。さらに、最近、住居の近くで幼児がよく遊ぶ遊び場について調べ、また調査期間中（1997年10月12日（日）～10月18日（土））の1週間について、けがをした曜日別の発生頻度についても集計・分析した。

結果および考察

有効回答者は表1の通りである。

表1 有効回答者の児の年齢・性別分布			
	男児	女児	計
1歳	139	157	296名
2歳	184	177	361名
3歳	241	271	512名
4歳	209	201	410名
5歳	211	181	392名
計	984	987	1971名

この有効回答者数は、A市およびE市における1歳～5歳児人口の1割強に相当し、調査例数としては十分信頼に値する数である。

A市およびE市は互いに隣接していて、共に私鉄（〇鉄道）、主要国道（246号）沿線を中心に開発発展中の地方都市である。

1. 遊び場

住居の近くの、子どもがよく遊ぶ遊び場について調べてみると（ただし、屋外の遊び場で、自宅から300mくらいの範囲内で）、私道や駐車場との回

答も認められ、都市化の影響が子どもたちの生活にも影を落としていることが伺える（図1）。

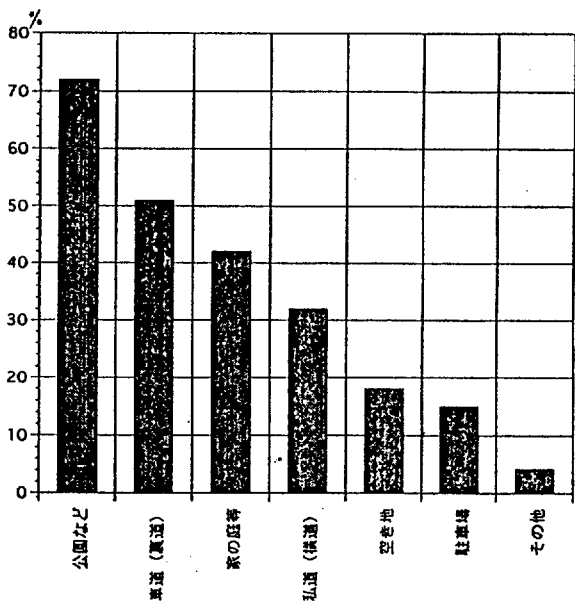


図1 住居近くの遊び場（3歳～5歳児）
（n＝1314 複数回答）

2. 過去1年間にけがをした者と受診状況

表2 過去1年間のけがと受診状況

	けがをした者	受診した者
男児	479名 (48.7%)	268名 (56.0%対479)
女児	321名 (32.5%)	166名 (51.7%対321)
全体	800名 (40.6%)	434名 (54.3%対800)

過去1年間にけがをしたとの回答と、そのうちで受診をしたと回答のあった者は、表2の通りであった。全男児984名中、479名（48.7%）がなんらかのけがをしており、女児の32.5%を大きく上回る成績であった。男児の方が不注意というよりも、本来の動き回る活動の違いによるものといえよう。

けがによる受診の率には、ある程度けがの症状の強さが反映すると思われるが、男女児間で大きな差はなく、全体では男児受傷者の56.0%、女児受傷者の51.7%が受診していた。

3. けがの発生場所

けがの発生場所について、年齢を3群に分けてその関連をみたものが図2である。

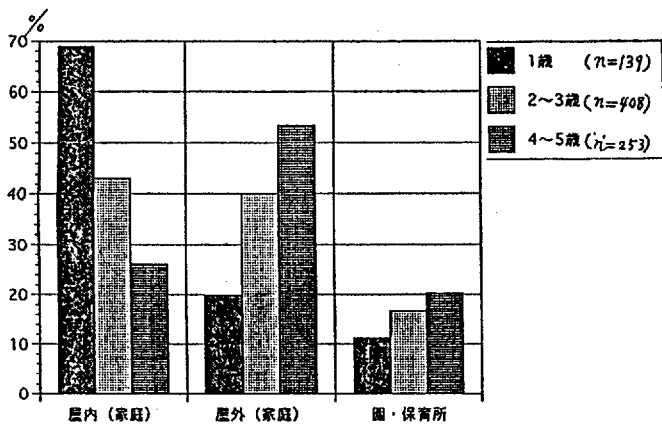


図2 けがの発生場所と年齢群

幼児が長時間いる場所、活潑に動き回る場所でけがの発生が多いことは当然であり、年少児では屋内が多く、これは年齢とともに減少している。

逆に、屋外 (家庭) および保育所・幼稚園での発生は、年齢とともに増えているが、屋外での増加がより顕著となっている。

4. 過去1年間のけがのおよその回数とその頻度

過去1年間にけがをした割合を年齢別にみると最も多かったのは2歳児の49.9%、最も少なかったのは、5歳児の22.7%であった。

けがの回数では、5回位は3歳～5歳児に多く、20回以上は年少の1歳～2歳児に多く認められる。このことは、3歳以降になると、運動機能をはじめとして身体の諸機能が発達していくことと関連しており、その結果を表わしているといえよう (図3)。

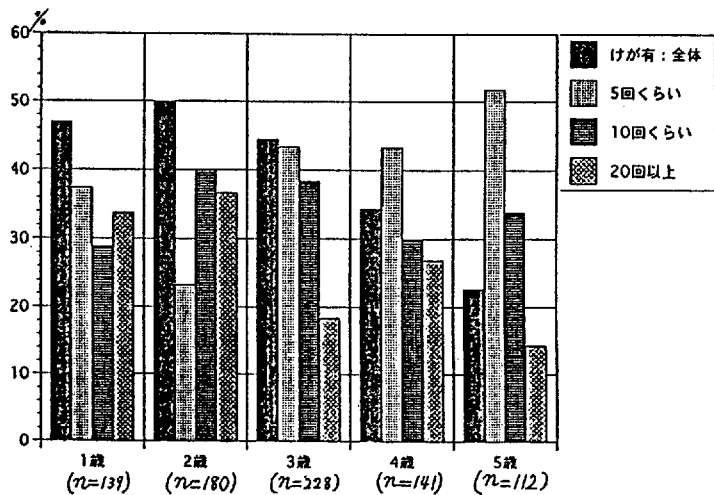


図3 年齢別けがの回数とその頻度 (過去1年間のけがについて)

5. けがの種類

1歳児、2歳～3歳児、4歳～5歳児の3群に分けて、けがの種類との関連をみたのが図4である。

全年齢を通して、擦傷が最も多く、以下打撲切り傷の順であった。とくに、擦傷は2歳～3歳児、4歳～5歳児に多く、打撲は1歳児に、切り傷は4歳～5歳児に多く認められた。この結果は先行研究とも一致しており、幼児のけがの特徴を示すものと考えられる (図4)。

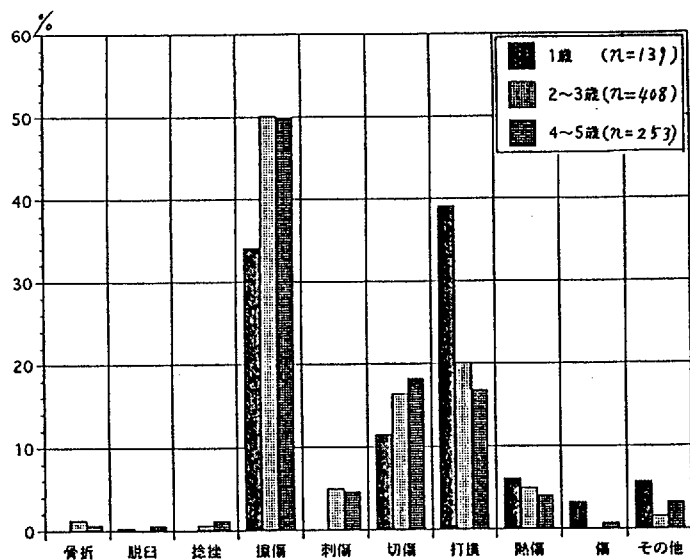


図4 多いけがの種類と年齢群

6. 最も大きいと思われたけがの原因

最も大きいけがの直接の原因を年齢群別にまとめたものが、図5である。全年齢群を通して最も多いのは転倒で、とくに2歳～3歳児群に顕著に認められる。

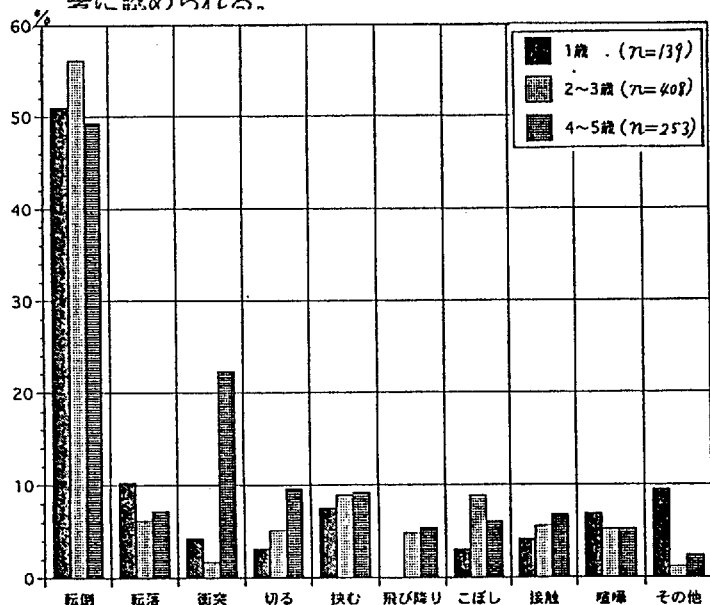


図5 最も大きなけがの直接の原因

年長児と年少児で差の著しいものは衝突で、4歳～5歳の年長児にきわめて多く認められた。

こぼし とは、熱いお湯や汁をこぼすことを指す。その他、転落、切る、挟む、飛び降り、喧嘩などは、いずれも10%未満の割合で認められた。

7. けがによる主な受傷部位

けがによる受傷部位を、頭部・顔面、上肢体幹、下肢に大別し年齢群によってどう変わるかをみたものが図6である。

これより、年少児には頭部・顔面の受傷が多く、年長になるにつれて減少する傾向にあることが伺える。

これに対して、下肢のけがは年少児には少なく、年長児には多くなる傾向が認められる

年長児になると運動が活潑になるが、頭や顔を打つような転倒は少なくなることが推測されて、このことも児の運動機能等の発達と関連するものと考えられる興味ある成績である。

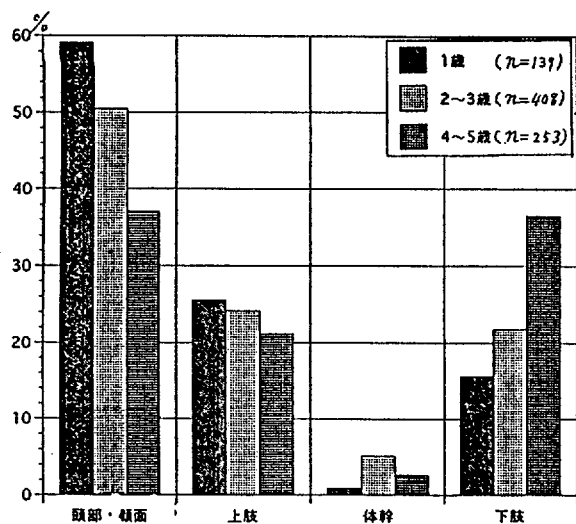


図6 けがによる主な受傷部位

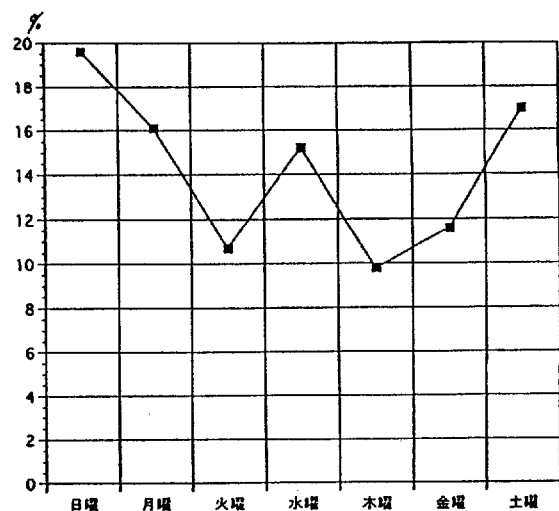


図7 1週間のけがの曜日別の頻度

8. 調査期間中（1週間）のけがの曜日別頻度

調査期間中（1997年10月12日（日）～10月18日（土））に、なんらかのけがをした者は全体で221名（11.2%）であった。

221名を母数として、曜日別の発生頻度を示したものが図7である。

日曜日が19.6%と最も多く、以下、土曜日・月曜日の順となっていた。

交通事故が土曜日に多いことは、多くの統計が示すところであるが、保育所や幼稚園が休みになる日曜日や土曜日が、やはりけがの発生は多くなっていて、予測通りの結果といえる。

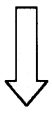
おわりに

神奈川県の大田区に位置する、2つの地方都市の保育所・幼稚園に在籍する1歳～5歳までの幼児を持つ母親を対象に、過去1年間の幼児のけがに関連する調査を実施し、その一部について報告した。

小児のこの領域に関する資料は少ないので大都市部や非都市部（農山村部など）にも調査の範囲を広げて、小児の事故の予防と安全教育に資するように努めたい。

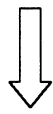
文献

- 1) 高倉 巖 他：幼児の「けが」、小児保健研究、40：6、1981
- 2) 田中哲郎：小児の事故、自由企画出版、東京、1991



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:神奈川県の中央地区に位置する A 市および E 市の保育所・幼稚園に在籍する 1 歳から 5 歳までの幼児の母親(保護者)を対象に、幼児の傷害事故に関するアンケート調査を実施した。2006 名(回収率 80.2%)を回収し、このうち有効回答者 1971 名について分析した。過去 1 年間について「けが(傷害)」をした児は、男児 48.7%、女児 32.5%で、そのなかで受診した児は、男児女児ともに 50%を超えていた。また、過去 1 年間の受傷発生頻度は、5 回位は 3 歳～5 歳児に多く、20 回以上は 1 歳～2 歳の年少児に多く認められた。受傷部位としては、年少児に頭部・顔面が多く、年長児には下肢が多かった。高い割合で認められたけがの種類は、全年齢通じて擦傷か打撲が占めていて、けがの主なる原因としては同じく全年齢を通じて転倒が最も多かった。調査期間中(1 週間)になんらかのけがをした曜日別発生頻度では、日曜日が最も多く、以下土曜日、月曜日の順であった。